

紀要

■設立50周年記念号

- 鳥浜貝塚におけるニホンジカの利用…………… 佐藤 巧庸 (1)
- 土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論…………… 瀬口 眞司 (13)
- 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石…………… 宮村 誠二 (23)
- 横穴式石室の空間設計の検討
—志賀古墳群における平面プランと副葬土器…………… 堀 真人 (28)
- 木村石塚古墳出土埴輪について…………… 辻川 哲朗 (40)
- 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討
—石敷き遺構 第1遺構の構造について— …………… 田中 咲子 (57)
- 小型海獣葡萄鏡について…………… 福井 知樹 (61)
- 墨書土器にみる古代の近江 —その2—…………… 濱 修 (64)
- 比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク… 小林 裕季 (79)
- 『阿刀氏家譜系脈 御由緒二関ハル古記調査書類』
現代語訳・解題(2)…………… 阿刀 弘史 (90)
- 将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—…………… 三宅 弘 (98)
- 「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの…………… 中川 治美 (107)
- マメ類の利用についての研究ノート(2)…………… 小竹 志織 (119)
- 木製品の保存処理について —課題と実際—…………… 中村 智孝 (122)

34

「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの

中 川 治 美

1. はじめに

「清瀧寺徳源院（せいりゅうじとくげんいん）」は米原市清滝（きよたき）(1)の山あいにある京極家菩提寺である（図1）。戦国期以前、近江国柏原の中心はこの清滝にあり、江戸時代初頭に新しく中山道が整備されて以降は、中心地が清滝から柏原宿へと移行した。

同寺は鎌倉時代中頃に創建され「清瀧寺」と称された。現在の清瀧寺徳源院は江戸時代中頃にこれを大規模に整備したものである。寺院および周辺の景観は、創建から700年余の間に複数の整備によって大きく姿を変えており、これらを知る手がかりとして、文書資料や絵図、発掘調査結果などがある。このうち絵図については、3つの同様の構図のものが知られている(2)。いずれも寺域およびその周辺の清滝を中心とする様子を描いたものであるが、詳しく見ると3つの絵図は随所で異なっていることが確認できる。

筆者は以前、これらの絵図に相違点があるという前提のないまま断片的に引用され少なからず混同されていること

に対し違和感を覚え、絵図の内容について比較検討を行った上、清瀧寺について若干の考察を記した（中川 2011）。また、その後に行われた発掘調査を踏まえ、清瀧寺とその周辺景観また京極氏の諸整備について述べ、清瀧寺が京極氏の精神的な拠り所となっていく過程、また江戸時代初頭から中頃に行われた同寺の整備が、京極氏の本貫地への思いとともに、京極家の後継としての自らの正統性を視覚的に示すという目的によって行われたことを論考した（中川 2012a・b）。

本稿は、以前に絵図の内容を記した際に詳述できなかった点について補足し、絵図について再整理するものである。

2. 清瀧寺と京極氏

京極氏は、700年余りもの間続く全国でも稀な氏族である。その間には盛衰を経て各地に拠点を移しており(3)、そのことが清瀧寺の在り方にも深く影響している。

京極氏と清滝との関わりは鎌倉時代中頃に遡る。当時清

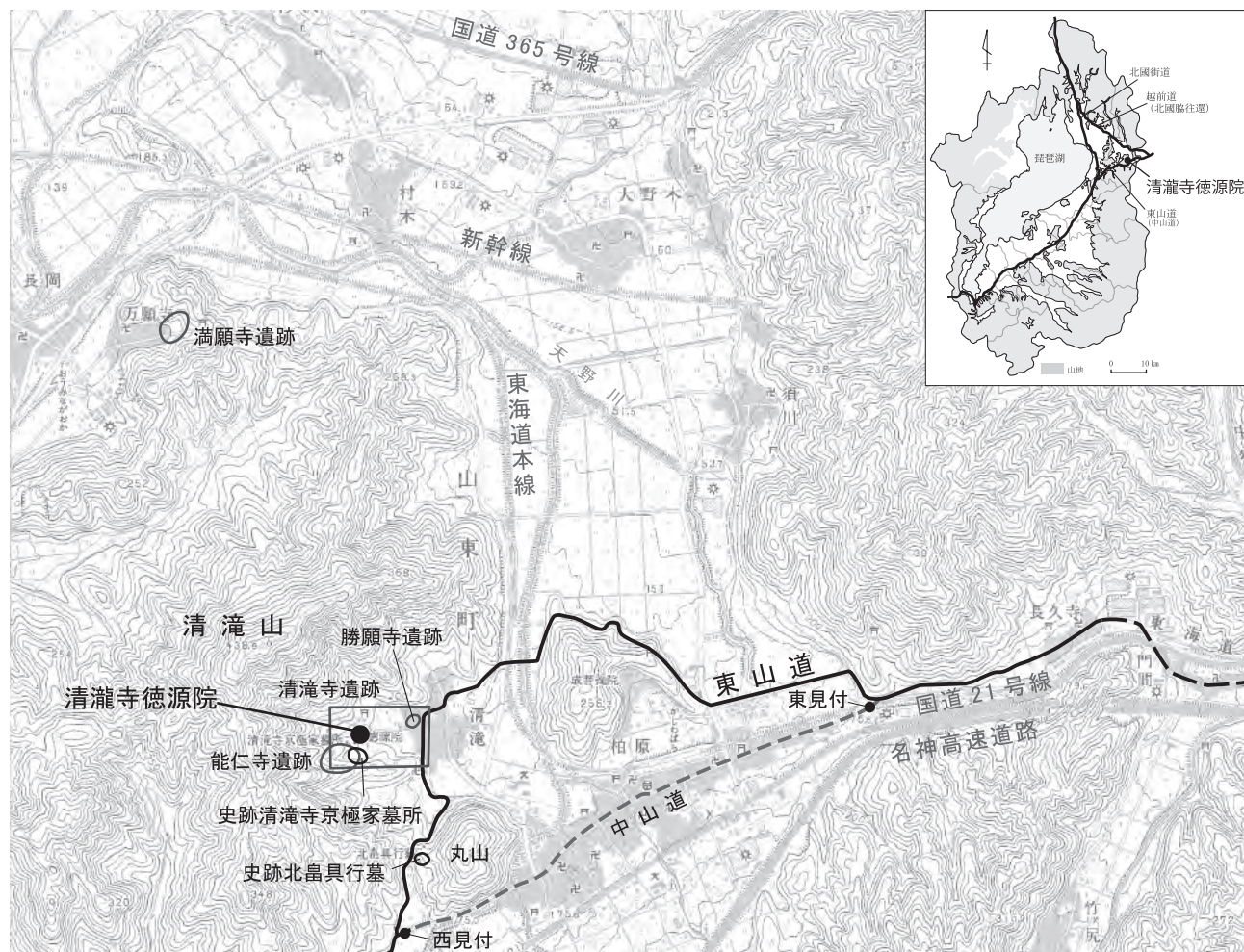


図1 清瀧寺徳源院の位置（S = 1 : 30,000）

滝の地には柏原弥三郎が地頭として存していたが、乱行のため後醍醐上皇の宣下により近江守護佐々木定綱によって討伐された。清滝にあった柏原弥三郎館は戦功により定綱に与えられ、この時以降、佐々木定綱の館として清滝に定着する。佐々木氏は、この定綱の子・信綱の時に四家に分かれ、このうち四男の氏信には近江愛知川以北六郡と柏原館が与えられ、京都京極高辻に屋敷を与えられたことから京極氏を名乗るようになる。

京極氏初代・氏信は弘安六年（1283）に寺院を創建して自らの菩提寺としており、これが清瀧寺の始まりである。これ以後、清瀧寺は京極家の菩提寺となった。

当初佐々木宗家から分家した一庶家に過ぎなかった京極氏であるが、室町時代に入り南北朝期の佐々木道誉としても知られる高氏は足利尊氏に仕えて急速に力を増し、持清の頃にかけて室町幕府四職家の一つとして名を連ねるなど勢力を拡大した。応仁の乱以後、戦国大名として北近江を拠点として活躍するが、室町時代の後半になると、継承問題で内紛が続く、北近江に台頭してきた浅井氏によって実権を失う。

清瀧寺は創建以来、京極氏が幕府の要職に就くなどした隆盛期には十分な整備や管理を受けるが、京極氏の継承問題に端を発し家臣団のクーデターに発展した大吉寺梅本坊公事以降の衰退期以後は著しく荒廃が進んだ。この間、京極氏の城や居館などの拠点あるいは菩提寺は勝楽寺、上平寺城、京極氏館など少なからず知られているが、清瀧寺は京極家の菩提寺として一貫して重要な位置を占めている。また、清滝とその周辺には満願寺、西念寺、勝願寺、能仁寺など、京極諸氏の菩提寺が集中して建立されており、清瀧寺そして清滝の地は京極氏の精神的な拠り所であった。

戦国期から江戸時代初頭にかけて、存亡の危機に瀕していた京極家を建て直し復興に努めたのが、中興の祖ともいわれる高次である。高次は北近江を離れ、近江の高島城主、大津城主と移り、関ヶ原戦以降、戦功により家康から若狭小浜藩主に命じられてここで最期を迎える。しかしながら子の忠高は清瀧寺に宝篋印塔とそれを納める石廟をつくる。また忠高は出雲松江藩主となるが、墓所は清瀧寺に造られている。高次・忠高は荒廃していた清瀧寺の整備も行っている。

一旦復興が進んだかのようにみえた京極氏であるが、忠高が後継を決めていなかったため、再び絶家の危機に陥る。当時末期養子は認められておらず、家臣らの苦勞の末、高次の関ヶ原戦の大津籠城の功や忠高の幕府への奉仕を認められ、京極家は辛くも存続することとなった。江戸時代前半こうして後継となったのが、甥の高和である。高和は播磨藩主、そして後の万治元年（1658）には讃岐丸亀藩主となり、京極氏はこの後、丸亀藩主として明治維新を迎えることとなる。高和は清瀧寺とその周辺の大規模整備に努め

たことが知られる。

寛文十二年（1672）、高和の子・高豊の折には自領播磨国二村を幕府に返上した上で、替わりに清滝村と大野木村の一部を清瀧寺の寺領として得た。さらに、散在していた歴代当主の墓を一箇所にまとめて墓所とし、位牌堂、三重塔を建て、庭園を整備して客殿を造り、さらに十二坊の建設を目指すなど、荒廃していた寺域を整備し、父高和の法号を冠した「徳源院」を建設した。現在の清瀧寺徳源院の直接的な原型がこの時造られた。

京極家当主の墓は、その後も京極高中まで清瀧寺に造られており、四国の丸亀藩が藩主京極家の菩提寺と墓所を近江に持つという稀な構図が整うこととなった。

3. 絵図

清瀧寺の伽藍配置やその周辺の景観については、同寺の創建から現代に至るまでの間の整備によって大きく変化している。この様子がうかがえるものの一つに、寺域および周辺の様子を描いた、内容を違える少なくとも3つの絵図が存在する。ここではA図、B図、C図と仮称する（図2・図3）。

【A図】清瀧寺徳源院所蔵のものである。『改訂近江國坂田郡志』（以下『改訂郡志』／（坂田郡教育会1941））、『山東町史』（以下『町史』／（山東町市史編纂委員会1991））、『史跡清瀧寺京極家墓所土塀修理工事報告書』／（徳源院2007）に掲載されている。ほぼ正方形で、一間四方ほどの大きさであり、折図であったのを近年表装されている。複数枚の紙を貼り合わせて描かれており、彩色が施されている。

南北に走る東山道と東西に走る十二坊中央の参道とを基軸に構成された清滝の様子が描かれ、3つの絵図の中では最も繊細な表現である。特に寺域については詳細に描かれており、樹木の種類や建物の屋根の区別なども非常に細密に描き分けている。凡例、地名などの文字もみられる。

本堂 徳源院の内堀の北西にある建物の右上には「本堂」と記されており、これが清瀧寺本堂と考えられる。屋根は茅など草葺きで表現される。

寺院の堀・門 徳源院は、十二坊中央を通って本堂へと延びる参道の南西に所在する。瓦葺きと思われる外堀、内堀、生垣によって区画された境内と、それらに付設する門、隣接する建物が描かれる。建物や庭を取り囲む堀の外側に生垣と思われる植栽があり、その外側に、本堂に続く参道から墓所下段を一の字に囲むように堀が配される。内堀は徳源院を囲むように方形に配され、庭園のある南側はやや外側に膨らみ、下段墓所部分は西に突出する。外堀は清瀧寺へ続く参道および下段墓所で途切れており、徳源院と清瀧寺本堂とが完全に分断されていないことは注目される。

堀に付設する複数の門および近接する建物の屋根は檜皮



図2 清瀧寺徳源院にまつわる
3つの絵図(1)
(上写真:「A図」, 下写真:「B図」)

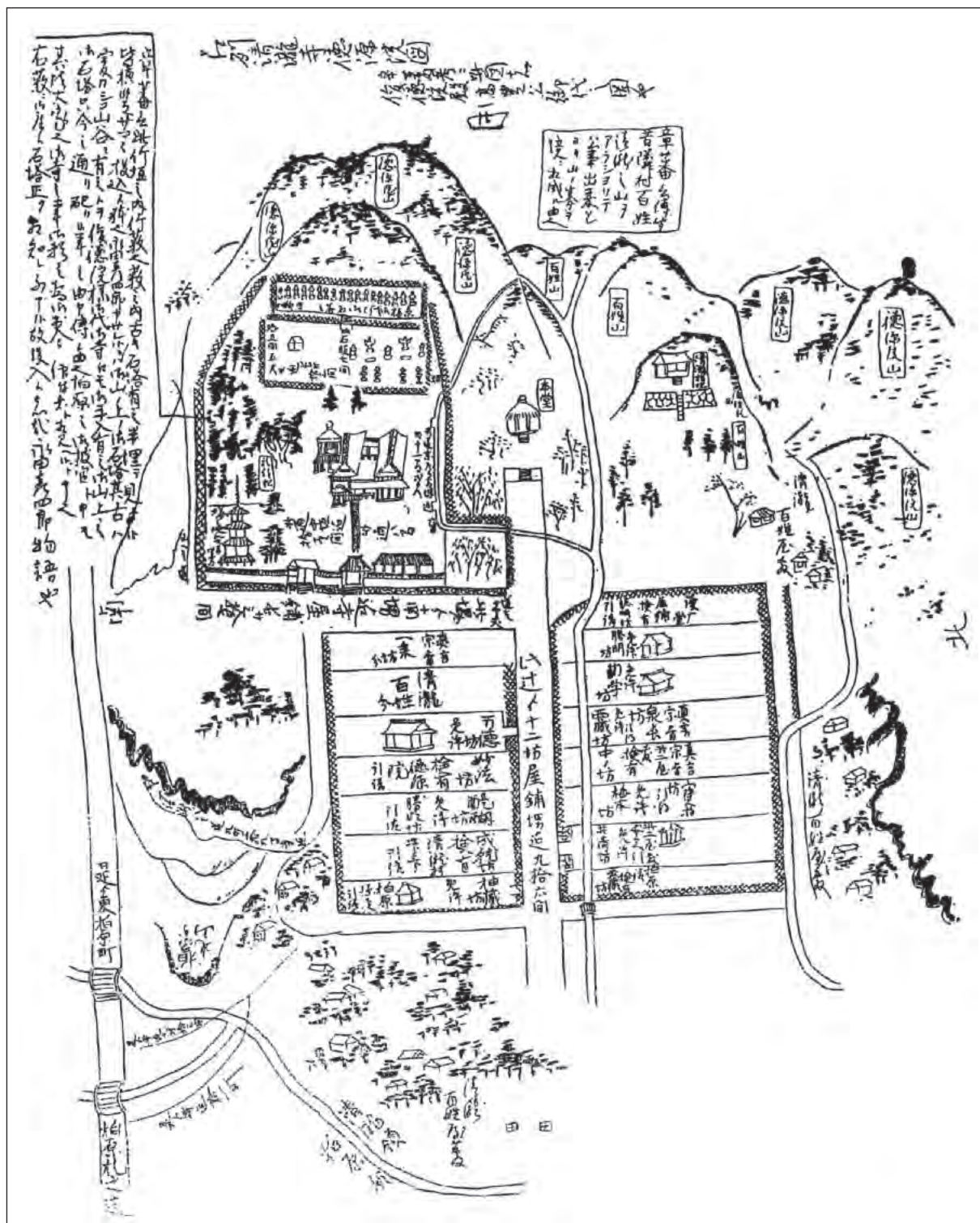


図3 清瀧寺徳源院にまつわる3つの絵図（2）（上図：「C図」）

葺あるいは柿葺きで表現される。これらの門は正面である東面に配され、東面の南側の門には「表門」、北側の門には「裏門」と「長屋」と記されている。

境内 やや南北に長い方形の境内には、中央から北寄りに、南から檜皮葺あるいは柿葺きの「客殿」「庫裏」建物が並び、間は東西2つの「廊下」でつながれている。建物の名称とともに、客殿正面には「玄関」、庫裏正面には「玄関」「勝手口」と記されている。客殿と庫裏、そして表門と裏門の間を結ぶように塀で仕切られている。塀は檜皮葺あるいは板葺きと思われる。

客殿の西側には石と樹木から構成される庭園が広がり、飛石や樹種に至るまで丁寧に表現される。またその北側、庫裏の裏手にあたる境内の北西奥には、蔵と思われる漆喰壁と瓦葺き屋根を持つと思われる建物と井戸が描かれる。客殿の南西、墓所の全面にあたる東側には檜皮葺あるいは柿葺きで「御佛殿」と記された建物がある。客殿西側の庭園と南北に隣接する蔵、そして御佛殿の間には、漆喰と板葺きと思われる塀によって境界を設ける。また、御佛殿の正面には客殿背面の並びに門が設けられている。

境内の南東隅には檜皮葺あるいは柿葺きと思われる三重塔が描かれる。その西奥には池が存在し、築山のような高まりと複数の樹木が確認され、庭園を構成しており、御佛殿の南方まで広がっている。

墓所 御佛殿とその南方の庭園の西奥には、上下二段に区画された墓所が描かれる。下段東面に入口を持ち、下段裏南寄りから、上段中央部へ通路が延びる。上段・下段の墓所はそれぞれ竹垣や塀で囲われている。

下段には、上段に延びる通路を挟んで、北側に檜皮葺あるいは柿葺きの木廟であろうか2基のほか、宝篋印塔2基、五輪塔3基が、南側に石廟1基、宝篋印塔1基が配される。南側の石廟は他の石塔が白色で表現されているのに対して緑色に着色されており、越前産の笏谷石を表現しているものとみられる。また、最も南側の宝篋印塔の上部には「壱岐守高峯公」と記されている。

上段は「上之院御墓所」と記されており、宝篋印塔18基が配置される。最も北側の宝篋印塔上部には「近江守氏信公」、最も南側の宝篋印塔の上部には「高教公御子三丁」、北から12番目の宝篋印塔の上部には「武蔵守高秀公」と記されている。

十二坊 中央部に本堂へと続く参道が延びており、その南側に「万徳仿」「妙法仿」「醍醐仿」「成就仿」「神蔵仿」の五坊、北側に「理教仿」「勧学仿」「西藏仿」「中仿」「梅本仿」「本住仿」「金蔵仿」の七坊の十二坊が配される。南北の坊は瓦葺きと思われる塀に囲まれている。また、建物はすべてにあるわけではなく、南側の「万徳仿」「妙法仿」二坊と北側の「理教仿」「勧学仿」「本住仿」三坊のみに描かれている。檜皮葺あるいは柿葺きで、参道寄り

に配され、建物のある坊にのみ門がある。

参道 本堂に続く参道は十二坊中央部分が幾分南にずれている。また、徳源院の表門には東山道から続くS字に蛇行する参道が描かれている。

寺域周辺 本堂に延びる参道の北側、十二坊の西側には「十二坊境内之御禁札」と記された高札、本堂の北東には檜皮葺あるいは柿葺きの「清瀧権現」、十二坊北側の七坊の東側で東山道の西側には「名木」が描かれている。名木は高光の菩提寺である勝願寺跡と思われる。高吉の菩提寺と考えられる「禅林寺」もみられる。また、清瀧寺の背後である西方には「御寺山」と記されている。東山道沿いには徳源院の表門に続く参道の南側に檜皮葺あるいは柿葺きの「石堂寺」が描かれる。北側の山裾には「壺仙寺」「宝持仿」「三乗仿」が記され、これらは檜皮葺あるいは柿葺きで描かれる。寺域外には茅葺など草葺の建物が複数みられ、百姓家と考えられる。他に、「東」、「西」、「南」、「北」の方位、「丸山」、「成菩提院山」、「源中納言具行御墓」、「猫折坂」、「天王谷」、「栗ヶ谷」、「巨泉谷」、「小泉谷」、「村木山」、「小谷山」、中山道と考えられる「海道筋」などの地名等の名称が記されている。また、「清瀧領田」「柏原領田」、「御寺山」、「宮山」、「田」、「畑」、「此峯通ヨリ西ノ方井伊□□□様御領長邑村万願寺村領」、「松平甲斐守様御下柏原」、「此丸山ノ峯通ヨリ南ノ方柏原領」、「此峯通ヨリ南ノ方柏原領」などが記されている。

制作時期 年号を示す文字などはないものの、絵図南東部に記される「松平甲斐守様御下柏原」より柏原宿が天領から大和郡山藩（柳沢家）領となった享保九年（1724）以降のものであり、さらに、現在の清瀧寺徳源院の石塔配置と比較すると、墓所の石塔は23代高或までのものが描かれていることから、享保九年（1724）～宝暦十三年（1763）の24代讃岐丸亀藩当主高矩の頃に描かれたものと考えられることができる。

【B図】清瀧地区所蔵のものである。『滋賀県文化財だより』（用田正晴1984）、『宝持坊遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（以下県・協会）1987）、『（町史）（山東町1991）』に掲載されている。縦約90cm×横約100cmの長方形で、彩色が施されている。元は折図で保管されていたが、昭和50年代に額に納められた。紙は縦方向に貼り合わせており、その重なりが確認できる。「坂田郡清瀧村領之繪図」と記されており、他に、地名、領地等の文字がある。裏には「地引繪図第式拾五号」の朱書きがあり、明治時代前期に政府により実施された地籍図関連事業に活用された絵図の整理番号と思われる。

清瀧区によると、これ以外に、B図を明治時代に模写したのも存在したということであるが、現在は見当たらず筆者は実見していない。

A図同様、南北に走る東山道と東西に走る十二坊中央の参道とを基軸に構成された清瀧の様子が描かれており、配置などはA図に大変似るが、全体に省略的な表現である。また、寺院の塀より外側が比較的詳細に描かれているのに対し、塀の内側は大変粗雑な表現であるという特徴を持つ。

本堂 徳源院の北西にある建物の上には「本堂」と記されており、これが清瀧寺本堂と考えられる。斜め前から描かれており、高床構造を持ち、屋根は檜皮葺あるいは柿葺きで表現される。

寺院の塀と門 徳源院は、十二の坊中央を通して本堂へと延びる参道の南西に所在する。境内は塀や生垣で区画され、東正面は石積みの上に竹垣を配している。このすぐ西側には檜皮葺あるいは柿葺きの建物が3棟描かれ、このうち南2つの東側には出入り口と思われる表現があり、門と考えられる。A図に比べると、塀や門の表現が粗雑で材質や構造も判別しがたいものが多く、区画という点からも、非常に曖昧な印象である。

境内 やや南北に長い方形の境内には、中央やや北寄りに、堂のような建物1棟、その北に2棟の建物がある。これらは檜皮葺あるいは柿葺きで表現される。その西側には漆喰の蔵であろうか、建物が1棟描かれる。境内の南東隅には檜皮葺あるいは柿葺きの三重塔がある。これら建物は本堂同様斜め前から描かれる特徴がある。

墓所 堂のような建物の西側には、東面に入口を持ち、上下二段に区画された墓所が描かれる。上段・下段の墓所はそれぞれ竹垣や塀で囲われている。

下段には宝篋印塔を意図したと思われる石塔が2基と木廟が、上段には、中央に五輪塔が5基描かれる。

十二坊 中央部に本堂へと続く参道が延びており、その南側に「万徳坊」「妙法坊」「醍醐坊」「成就坊」の四坊、北側に「理教坊」「勸学坊」「西蔵坊」「中坊」「梅本坊」「本住坊」「金蔵坊」の七坊の十一坊が配される。また、A図同様、建物はすべてにあるわけではなく、南側の「万徳坊」「妙法坊」二坊と北側の「理教坊」「勸学坊」「本住坊」三坊のみに描かれている。檜皮葺あるいは柿葺きで、万徳坊と理教坊にのみ門と思われる建物がある。

参道 本堂に続く参道は十二坊中央を通る参道の延長に描かれる。また、徳源院の表門には東山道から続くS字に蛇行する参道が描かれている。

寺域周辺 本堂に延びる参道の北側、十二坊の西側には高札が描かれている。十二坊北側の七坊の東側で東山道の西側には「白樺」と記されており、高光の菩提寺である勝願寺跡と思われる。また、本堂の北東には清瀧神社と思われる建物があり、その背後である西方には「宮山」と記されている。東山道沿いには徳源院の表門に続く参道の南側に檜皮葺あるいは柿葺きの「石堂寺」が描かれる。北側の山裾には「禅林庵」「宝持坊」「三乗坊」が記され、これらは檜皮葺あるいは柿葺きで描かれる。

「禅林庵」は高吉の菩提寺と考えられる。寺域外には茅葺など草葺の建物が複数みられ、百姓家と考えられる。他に、「成菩提院山」、「丸山」、北畠具行のものと思われる宝篋印塔、「猫折峠」、「奥谷」、「天王谷」、「火打石」、「栗ヶ谷」、「巨泉谷」、「小泉谷」、「姥ヶ谷」、「小山」、中山道と考えられる「海道筋」など地名等が記され、徳源院参道の北側には現在の大門川と思われる川も描かれている。また、「東」「西」「南」「北」の方位、「清瀧領」「柏原領」「御代官下柏原」「此丸山ノ峯通ヨリ南方柏原領」「御代官下長沢村」「此峯通ヨリ長口萬願寺領」「此所村木清瀧二ヶ村領境」「此所村木清瀧大野木三ヶ村領境」「此川筋内清瀧領」「此川境大野木領」「此川筋ヨリ東南柏原領」「井伊口口口様下長邑村」「井伊口口口御下万願寺村」「御寺山」「宮山」「御公林」「田」「畑」「一東方塔ノ下ヨリ立杭迄拾六町三門」「一西方山續面間数不分明」「一南方猫折下ヨリ申堂迄四町四拾八間」「一北方立杭ヨリ姥ヶ谷迄壹町三拾一間」などが記されている。

制作時期 絵図には「元禄十三年辰十一月十一日」とあり、高豊によって整備された28年後の元禄十三年（1700）、元禄七年（1694）～享保九年（1724）の23代讃岐丸亀藩当主高或の時に描かれたものということになる。下段墓所の3基の石塔が高豊までのものとすれば、24代高矩の頃に描かれたA図より前に描かれたもののようにも思える。

しかしながら、B図は、対象範囲や構図がA図と非常に酷似しているなかで、墓所および徳源院境内は粗雑に省略的に描かれており、むしろ精緻に描かれたA図を模写したとも考えられる。一方で、元禄年間には幕府による国絵図改が行われており、絵図がこれに関連する一連のものであると考えれば違和感はないのかもしれない。

さらに、絵図の裏に記された文字からは明治前期の地籍図として使用されたと考えられ、当該期に描かれたものとも思われる。

いずれにせよ、A図とB図の新旧関係については、検討の余地があるといえよう。この点については改めて論じることとする。

【C図】県・市または個人蔵と考えられるもので、『滋賀懸史蹟調査報告五』（肥後和男 1933／以下「史蹟報告」）、『（改訂郡志）』（坂田郡教育会 1941）、『（町史）』（山東町 1991）に掲載されている(4)。コピーなど簡易印刷によっても見易いためか、長らくこの図が引用されることが多かった。現在筆者は原図の所在が確認できず、実物を見ていないため、大きさや筆記具の種類、彩色の有無等が不明であるが、樹木の表現に一部墨などで描かれたと思われる太くぼつたりした線がみられるものの、全体に細い線で描かれる。彩色は施されていないように思われる。他の2つの絵図に比べ多くの文字表記があるのが特徴である。

絵図には「江洲清瀧寺徳源院図」「章蕃考ニ此図者 俊

徳院殿高豊公御代之図也」、また「永田彦四郎物語也」等ともあり(5)、高豊の頃の絵図であると記され、記入者の考えや、江州郡代(6)永田彦四郎の話など伝聞の事柄なども記したということになる。「章蕃考ニ此図者」とあることから、絵図の制作者と文字の記入者が違うか、模写した絵図に文字を記したものと考えられる。

A図・B図同様、南北に走る東山道と東西に走る十二坊中央の参道とを基軸に構成された清瀧の様子が描かれているが、十二坊北側の百姓屋敷の背後の山から北側が描かれておらず、凡例もなく、内容も他の2つの絵図の近似性に比べると大きな隔たりがある。

本堂 徳源院の内堀の北側にある建物の上には「本堂」と記されており、これが清瀧寺本堂と考えられる。屋根は茅など草葺きで表現される。

寺院の堀と門 徳源院は、十二の坊中央を通して本堂へと延びる参道の南西に所在する。堀で区画された境内と、それらに付設する門、隣接する建物が描かれる。堀は北東部で参道側に方形に突出し、植栽がみられる。また、堀は西側にある墓所まで延びており、徳源院が完全に分離した空間となっている。

堀に付設する複数の門および近接する建物の屋根は桧皮葺で表現される。これらの門は正面である東面中央に配され、北側の門の北には1棟の建物が描かれている。

境内 南東隅には瓦葺きと思われる三重塔が描かれている。後述するが、三重塔の屋根構造は柿葺であったのを瓦葺にしたことがわかっている。中央北寄りには、2つの廊下でつながれた2棟の建物が並び、北側の門から2棟の建物の間に堀が延びている。これら建物の南側には堂と思われる高床構造の建物が配される。西方には墓所が描かれる。三重塔西奥の樹木には「礼口松」と記されている。

墓所 A・B図同様、上下二段に区画された墓所が描かれる。下段東面に入口を持ち、下段裏中央から上段中央部へ通路が延びる。上段・下段の墓所はそれぞれ竹垣や堀で囲われている。

下段には、中央より南側に石廟があり、北側に宝篋印塔と思われる石塔が2基のほか7基の石塔がある。また、上段には石塔が18基配置され、「京極御代々御石塔」と記されている。これら石塔の表現は宝篋印塔とも五輪塔とも判別し難い曖昧な表現となっている。

十二坊 中央部に本堂へと続く参道が延びており、その南側に「真言宗旨一乗坊分」「清瀧百姓分」「万徳坊免許」「妙法坊検有徳源院引請」「醍醐坊免許勝明坊引請」「成就坊検有清瀧村次郎三郎引請」「神蔵坊免許柏原源兵衛引請」、北側に「護摩堂屋敷検有勝明坊引請」「免許勝明坊」「免許勧学坊」「真言宗旨泉長坊引請免許西蔵坊」「真言宗旨此二屋敷検有中ノ坊」「寶持坊引請免許梅本坊」「此二屋敷安兵衛引請免許井清坊」「柏原請検有金蔵坊」と記

されており、殆どの坊が引請されていることが記されている。南北の坊区画は堀に囲まれており、建物は南側の二坊「万徳坊」「神蔵坊」と北側の「勝明坊」「勧学坊」「井清坊」三坊のみに描かれている。南側の「万徳坊」「神蔵坊」と北側の「井清坊」にのみ門表現がある。

参道 十二坊中央から本堂に続く参道はまっすぐ延びている。また、徳源院南側の門前には山間から急に湾曲して十二坊の南側に沿って直進する参道が描かれる。

寺域周辺 東山道より東側はほとんど描かれていない。本堂の北東には檜皮葺あるいは柿葺きの「清瀧権現」が描かれる。また、現在の大門川と思われる川が山手から徳源院境内を通り、十二坊北側の区画を流れている。周囲の山には「徳源院山」「百姓山」と記されているほか、寺域外には茅葺など草葺の建物が複数みられ「清瀧百姓屋敷」と記されている。周辺地名の記述はほとんどない。中山道と思われる道が直線的に描かれている。また、「西」「南」「北」の方位の他、「是方東柏原町」「柏原札之辻」「清瀧領」「柏原領」「柏原分丸山」などが記されている。

その他 C図には他の2絵図にはない、「此堀方南堀迄寺屋敷長サ三拾七間」「此辻方十二坊屋敷敷迄九拾六間」「是方清瀧へ之道九町三拾九間寺迄」「是方寺迄九町拾三間」「此道東屋敷堀迄四十一間丈尺」など、随所に記された距離や寸法が特徴的である。また、「章蕃云傳聞 昔隣村百姓 清瀧之山ヲ アラシヨリテ 公事出来ソレ ヨリ山ノ峯ヲ 境ニ相成ル由也」「章蕃云此竹垣之内竹藪也藪之内古キ石塔有之半埋テ見エ申候 皆横堅サマザマ投込候舩也 永田彦四郎申サレ候ニハ御山ノ上ノ御石塔其古ハ 爰カシコ山谷ニ有之候ヲ 俊徳院様御代御寺江モ御手入有之御山上之 御石塔只今之通り配リ候事之由申傳候由也 柏原之御被官ト申モ 其頃大家也御寺之事御頼ミ為御出入被 仰付者ト相見へ候ト申也 右藪ニ御座候石塔正ク相知レ不申候故投入候者哉永田彦四郎物語也」とも記されている。

制作時期 「章蕃考ニ此図者 俊徳院殿高豊公御代之図也」とあり、文字の記入者によれば高豊の頃の図ということになるが、絵図が制作されたのはより後世で、高豊の整備した徳源院とその周辺の様子を後世に描いたものである。

3つの絵図には南東部に清瀧から京極橋を通り柏原宿へ至る道が描かれているが、C図にのみ、この道の西にもう一つ別の橋を通る道がある。この橋は現在の清瀧橋と考えられるが、建設されたのは大正時代中頃以降であり、それ以前は清瀧橋を通る道は開設されていない。

写真1は、大正時代中頃の中山道を東から西に進む稚児行列の様子を撮影したもので、道の両脇には柏原宿の家並みが連なる。写真2は、同じ場所を写真1とほぼ同じ方向から最近撮影したもので、道の北側にある左手前の2軒の家は、現在、「御茶屋御殿」を含む都市公園と、国道21号から中山道を直行方向に横断して清瀧橋を通して清瀧へと



写真1 大正時代中頃の柏原宿（御茶屋御殿付近）
左2軒の建物位置に新しい道ができる



写真2 現在の柏原宿（御茶屋御殿付近）
中山道柏原宿から清滝に通じる道が開設されている。

続く道となっている(7)。写真1は大正時代中頃に撮影されたものであり、清滝から清滝橋を通過して中山道へ至る道が、写真の撮影された大正時代中頃以降に開設されたことを示している。

C図については三重塔の屋根構造や衰退した十二坊の様子等によってA図・B図より新しいものと捉えられ、さらに清滝橋を通る道の存在によって、20世紀初頭以降に描かれたものと判断される。以上のことから、C図は3つの絵図の中で最も新しい時期に作成されたもので、現段階では、清滝橋の開設された大正時代中頃以降から肥後和男によって掲載された昭和8年までの間に描かれた絵図ということができる。

このように、これら3つの絵図は、いずれも寛文十二年(1672)高豊による整備後の徳源院とその周辺を描いたものであり、南北に走る東山道と東西に走る十二坊中央の参道とを基軸に構成された清滝の様子をほぼ同じ構図で描いているという点は共通しているが、細部にはかなりの相違点が認められるのである。なかでも墓所は最も差異のある部分である。

A図は建物の向きや屋根の種類、樹種などを描き分け、石塔や庭園を丁寧に表現するなど、全体に細密で特に徳源院について詳細に描かれているといえる。一方、B図はA図に近似しており、省略や独自のものもみられるなど違いはあるものの、徳源院の堀の外側が詳細であるのに対し、内側はA図に比べ大変粗雑で省略的であるという大きな特徴がある。C図については他の二つと構図は似ているものの、清滝の北側については描かれておらず、全体に粗雑で省略されており、石塔の数や表現等も非常に曖昧である。また、十二坊の部分の記述からは多くの坊が成立し得ない状況であったことがうかがえる。そして伝聞の記述もあり、現在の清瀧寺徳源院や清滝区の様子に共通するところも多くみられる。

以上のことから、徳源院を考えるにあたってはA図を絵図の基礎資料として捉えることができ、C図は他の2つあるいはどちらかを参考に後世に模式的に写し、制作当時の景観とともに独自の解釈や伝聞されたものを文字によって書き加えたものと判断される。

A図の清瀧寺徳源院蔵絵図はとすると誇張もあるかもしれないが、非常に細密に描かれており、京極氏また制作者の意図が反映されていると思われ、当時の徳源院および周辺の様子、そして徳源院を取り巻く環境、情勢を知る上で重要な手掛かりとなる。C図は他の絵図に比べ明らかに新しい20世紀初頭以降のものであるが、伝承や比較的新しい事柄を知る上では参考になる。3つの絵図はそれぞれの性格を踏まえた上で、議論されなければならないのであり、C図の妄信的な利用は課題あるものと思われる。

4. 現在の伽藍配置と絵図

徳源院は整備されつつ現代に至り、清瀧寺徳源院と称されている。清瀧寺徳源院は絵図と伽藍配置が異なっている(図4)。東入りであることは同じであるが、東側の堀に付設する門は1つで、門を入ると北から客殿、本堂、位牌堂が並びそれぞれが廊下でつながれている。

伽藍の中で最も重要な位置を示すのは位牌堂であり、この位牌堂には高次・忠高と、同寺に墓所のある高和・高豊・高或・高矩・高中の木像が置かれる。

位牌堂の西背後には歴代の墓所がある。墓所は上下二段に区画され、間には階段が設けられている。上段には初代氏信から高吉までの宝篋印塔18基が配置され、下段には高次の笏谷石製の石廟の他、忠高・高和の宝篋印塔、高豊・高或・高矩・高中の瓦葺きの木廟という、高次から高中の墓がある。また、高次墓の南には高次の次男であり高和の父である高政、そして丸亀藩の世継ぎであったが早世した高美・高迢の石塔が並び、高朗の讃骸塚がある。忠高と高和の廟の裏手には、殉死した3名の五輪塔が建てられている。墓所の入口に近い部分には、高或の折に分家した多度津藩主の石塔、南東隅には北畠具行の石塔が並ぶ。

寺域の南東部に三重塔が描かれるのは同様であるが、庭園は客殿の西側のみとなり、三重塔北側から西側は一字形に池で囲まれている。北西隅・北東隅・南東隅の堀近くには蔵がみられる。

三重塔は昭和51～53年にかけて修復されている。修復前は瓦葺であったが、修復時の調査によって元来の柿葺に戻された経緯がある(徳源院1978)。A図・B図は桧皮葺あるいは柿葺きに表現されており、改築前の様子を表すものといえる。一方、C図の塔は瓦葺と思われる。

徳源院の東側にあった十二坊は坊跡と考えられる方形の段差が認められるが、畑や民家が並んでおり、坊建物は現存しない。清瀧寺徳源院の参道はかつての徳源院参道と同じ位置にあり、大門跡から徳源院十二坊の中央を西にまっすぐ延びた後、北東の角を南に折れ正門に向かっている。かつての清瀧寺参道は「苔の道」と称され山間にその姿を留める。

本堂は絵図に描かれた本堂の辺りの小字「本堂奥」にあったといわれるが、現在は残っていない。現在の清瀧寺徳源院は、徳源院の寺域をほぼ踏襲していると考えられ、修理を繰り返される中で、最終的に徳源院の伽藍内に清瀧寺の本堂が設けられたものと理解される。

高豊が整備してから現在に至るまでには、近年では本堂が平成14年に新築されるなど、江戸時代においても幾度かの修理や改築が行われている。この間に清瀧寺本堂が徳源院の境内に取り込まれ、建物や庭園の構造や配置が変わるが、寺域の周囲に廻らされた堀の範囲を大きく越えて整備されたものではなく、寺院そのものを再建するようなも

のではない。

3つの絵図と清瀧寺徳源院の伽藍配置および周辺の様子の違いは、高豊以降の修復と絵図の制作時期等を考える上で興味深い。

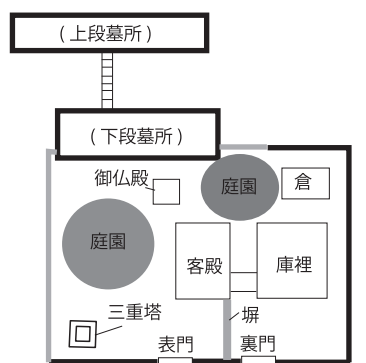
5. 清瀧寺とその周辺景観

清瀧寺がその創建から大きく変貌していく様子が、絵図や文書、発掘調査結果によって幾分明らかになってきたが（中川 2011・2012a・2012b）、その全貌はいまだ明確ではなく、現状では非常に捉え難いものとなっている。

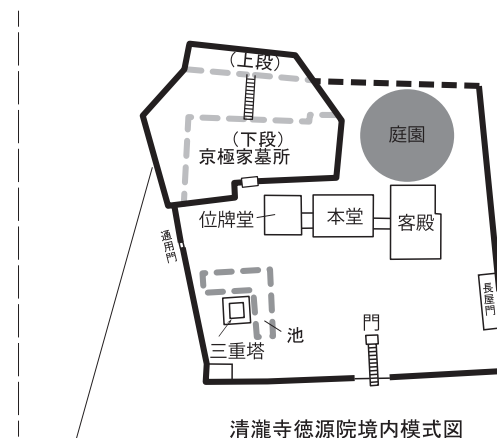
その背景には京極氏の盛衰とともに、江戸幕府による中山道の整備があげられる。江戸時代初頭に整備される以前の東山道は、成菩提院山の北側から天野川を横切って清瀧に入り、丸山の裾から北畠具行卿墓のそばを通り、猫折坂を通過、梓河内方面へと抜けてゆき(8)、清瀧寺は当時の主要道である東山道に近接する位置にあった。中山道は京

極氏の拠点である清瀧をショートカットするようにつくられ、それにもなつて近江柏原の中心は清瀧から幕府直轄地(9)である柏原宿へと移行し、同寺をとりまく景観・環境も改変を余儀なくされた。

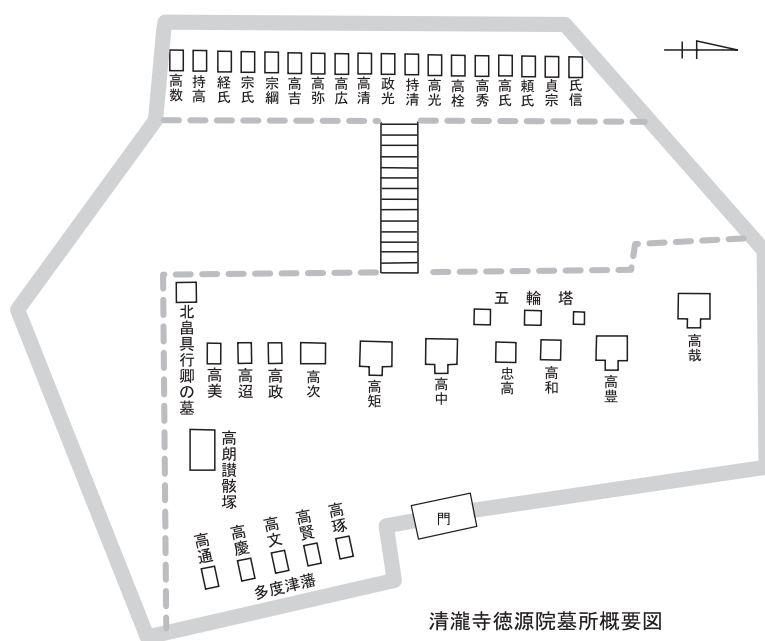
そして清瀧寺と周辺の景観を捉え難くしている大きな要因は、京極氏の度重なる諸整備によって同寺が創建時から大きく変貌を遂げていることである。なかでも今日の清瀧寺徳源院の景観を形成する直接的要因となったのは、高和・高豊による大規模な徳源院建設と周辺整備である。さらにはそれ以前に周辺建物や墓所の景観を決定づける高次・忠高による諸整備があった。高次は京極氏の存亡が危ぶまれる中で後継として京極家を再興するも近江を離れることとなり、子の高和もさらに松江に転封となる。本貫地への思いに加え、清瀧寺との関わりを示し、寺域に墓を造ることは、京極家の継承者としての自らを示すために重要であったのである。



徳源院境内模式図（「絵図A」より作成）



清瀧寺徳源院境内模式図



清瀧寺徳源院墓所概要図

図4 清瀧寺境内模式図

同寺は、初代・京極氏信以降、現代に至るまでの七百年余りにわたって京極氏の盛衰に伴って興廃しつつも、京極氏の拠り所として重要視されてきた。当初は東山道に近接する政治的・経済的拠点のひとつであったかもしれないが、次第にそれらに加え強く精神的な拠り所と変貌していくのであり、それは京極氏存亡の危機を迎え、近江を離れざるをえなかった高次そして忠高にはことのほかであった。高次墓は清瀧寺の一面に造られ、現在の位牌堂背後の墓所には、高次の宝篋印塔が越前産の笏谷石で作られた石廟に収められている。高次の墓所としては他に転封先の島根県松江市の安国寺にも同様の笏谷石製宝篋印塔の供養塔があり、共に福井県小浜で製作されたものが運ばれたと考えられている。こうした本貫地への思いは清瀧寺に墓が造られた高次の頃まで受け継がれたのであろう。

また、忠高の甥で絶家の危機を過ぎ播磨藩主から丸亀藩主となった高和と、丸亀2代藩主・高豊には、傍系であるがゆえに、京極家の後継として、自らの正統性を強く示す必要があった。高和が着手し高豊が完成させた徳源院は清瀧寺の本堂を取り込んでおらず、位牌堂を中心とする墓所領域を整備した広域の清瀧寺境内にある院であり、清瀧寺の堂塔整備を目的としたものではない。

こうした清瀧寺の整備、特に墓所領域の整備による徳源院の建設のほか、京極氏の始祖である氏信が発した『佐々木氏信寄進状』への奥書、京極氏が勢力を拡大する先駆けとなった京極高氏の『清瀧西念両寺々務条々』への奥書も、後継者を強く意識させるものである。

始祖氏信の建立以来一貫して京極家菩提寺であった清瀧寺を整備し、その境内に歴代の当主の墓を集めた墓所を中心とした徳源院を築き、視覚的にも自らの後継としての正統性を示したといえる。

しかしながら、江戸時代後半の高朗は徳源院に遺髪塚を造るも、墓所は丸亀にあり、明治維新を迎えた朗徹に至っては東京麻布の光林寺に建墓する。京極家が丸亀藩主として安定期を迎えるとともに、清瀧寺や清瀧への思いや必要性は次第に薄れていったのであろう。清瀧寺徳源院に伝わる絵図は、清瀧寺への思いと関わりが必要であった江戸時代中頃の高矩の頃に描かれたと考えられる。

ところで、絵図には、位牌堂、墓所、本堂、三重塔で構成される京極家菩提寺の宗教空間が描かれている。そして、この空間は高和・高豊の整備後長らく、一般人が入ることを許されなかった箇所である。現代では名高い名利として誰もが普通に参道を通り徳源院境内に入り、墓所内部を見ることができるが、このようになったのはごく近年のことで、昭和の中頃にあっても十二坊跡中央の参道には東に大門があり、通行は自由ではなかったのであり、江戸期にはなおさら境内への一般の立ち入りは許されなかった(10)。つまり、京極氏また徳源院関係者は寺院の内外を見ることが

ができるが、それ以外の人は見る事が制限されていたのである。絵図はこのようななかで描かれたものであり、京極家関係者以外は寺域に立ち入って描くことができなかったと推察される。絵図は制作者の意図が反映されているとともに、こうした制限も影響していたと思われる。

6. おわりに

本稿では、清瀧寺徳源院にまつわる3つの絵図について、特にC図について、以前に詳述できなかった点について補足し整理した。

清瀧寺の所在する清瀧山の東裾は東山道に近接し、京極氏以前をかざる柏原弥三郎の館があったとされる。京極氏初代氏信が清瀧に同寺を建立して以降、周辺には多くの京極諸氏の菩提寺が建立されるなど、京極氏の拠り所となっていく。そして、清瀧寺の在り方とその整備は京極氏と盛衰を共にして現在に至る。

戦国期には京極氏の存亡が危ぶまれる中で、高次の後当主となった高広の後、高広の弟・高慶の子とされる高次がどのように当主となっていったのか明確ではないが、高次は、京極家を建て直すも近江を離れ、子の忠高は松江藩に転封となる。こうしたなかで、京極氏本貫地への思いに加え、初代氏信以来の京極家菩提寺・清瀧寺に墓所を造営することで自らの継承者としての正統性を示す必要があり、清瀧寺に対するアプローチが重要な意味を持つものであったと理解される。

さらにこのことは、忠高の甥という傍系で絶家の危機を脱し、丸亀藩主として京極家の基礎を固めた高和と子の高豊についてもいうことができ、京極氏の始祖・氏信と京極氏の基盤を確立したともいえる高氏が発した清瀧寺にかかわる文書に奥書を添え、自らとの関係性を強調し、高次・忠高とのつながりと清瀧寺との関わりの中で、後継としての丸亀藩主京極氏の地位や性格を示すために清瀧寺の墓所領域を整備し徳源院を造ったと捉えられる。

筆者はかつて、文書資料を中心に研究されてきた成果に加え、本稿で紹介した絵図、そして発掘調査結果を踏まえ、清瀧寺とその周辺景観について記し、それらと諸整備、京極氏との関わりについて述べた。また、清瀧寺が京極氏の精神的な拠り所となっていく過程、江戸時代初頭から中頃に行われた高和・忠高そして高和・高豊による同寺の整備が、京極氏の本貫地への思いとともに、京極家における自らの後継者としての正統性を視覚的に示すという目的によって行われたことを論考した。本稿でもこれらについて若干触れたが、これについては別稿（中川 2012a・b）を参照されたい。

文書や絵図はそれ自体が貴重であり、当時の様子を知る資料としても大変重要であるが、発掘調査によって考古学的検証を行うことでさらに実証される。今後、文書や絵図

などの新たな資料の発見や下層調査によって、清瀧寺の実像が明らかになることに期待したい。

文末になったが、本稿を記すにあたって、筆者が2008・2009年両年度に清瀧寺遺跡の発掘調査を担当して以来、清瀧寺徳源院御住職山口光秀氏には多大なご支援をいただいているほか、西村武司氏をはじめ地元清瀧区の方々、米原市歴史文化財保護課桂田峰男氏・高橋順之氏・小野航氏には大変お世話になった。記して謝意を表したい。

註

- (1)現在の行政区では「清瀧」が用いられ、それ以前は「清瀧」と表記されていた。遺跡名は「清瀧寺（きよたきでら）遺跡」とされている（滋賀県教育委員会2017）。現在清瀧に所在する京極家の菩提寺は「清瀧寺徳源院（せいらいゅうじとくげんいん）」と表記し、寺院の使用例に従った。
- (2)これらの絵図とは別に、徳源院境内のみを描いたものとして『徳源院境内古図』がある。特に庫裏内の間取り等が細かく記されており、伽藍配置は現在の清瀧寺徳源院と異なり、A図に近い。文政二年（1819）とあり、高朗の頃のものと考えられる（中川2012a）。
- (3)京極氏の政治的な動向や盛衰については、（坂田郡役所1913）・（坂田郡教育会1941）・（山東町1991）のほか、（太田2003）・（小和田2005）・（北村2018）・（宮島2008）など、先学の研究に詳しい。
- (4)C図は『坂田郡志』（坂田郡役所1913）にも見られず、いまのところ『（史蹟報告）』（肥後1933）が初現である。その後年に刊行された『（改定郡志）』（坂田郡教育会1941）に掲載されていることから、筆者は原因が清瀧寺の所在する旧山東町を含む坂田郡合併後の新市である米原市に保管されているのではないかと思いついた。しかしながら、市史資料等は整理中で、2018年現在では、C図は確認されてない旨、米原市よりご教示を得た。その後整理が進む中で資料が確認され、実見できることを期待したい。
- (5)C図に記された文字については、小野航氏（米原市歴史文化財保護課）に翻刻いただいた。
- (6)（丸亀市史編さん委員会1994）では郡代とする。
- (7)写真については桂田峰男氏（米原市歴史文化財保護課）に御教示いただいた。
- (8)東山道のルートについては（谷口徹1996）による。
- (9)享保九年（1724）以後は大和郡山藩（柳沢家）領となる。
- (10)十二坊については、元禄五年（1692）に牛馬や地下人の立ち入りに対し、高豊が禁制を出している。

挿図典拠

図1（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2012）より中川作成。

図2（A図）清瀧寺徳源院所蔵。中川撮影。

（B図）清瀧区所蔵。中川撮影。

図3（坂田郡教育会1941）所収。

図4（中川2011b・2012）より中川作成。

写真典拠

写真1（柏原宿歴史館2007）所収。

写真2 中川撮影。

文献（著者名・刊行機関名50音順）

- 太田浩司（2003）「京極氏の歴史」『京極氏の城・まち・寺—北近江戦国史—』伊吹町教育委員会
- 小和田哲男（2005）『近江浅井氏の研究』清文堂
- 柏原宿歴史館（2007）企画展『ある日 ある時 写真展』
- 北村圭弘（2018）「南北朝期・室町期の近江における京極氏権力の形成」『紀要』31
- 坂田郡教育会（1941）『改訂近江國坂田郡志』第一～七巻
- 坂田郡役所（1913）『坂田郡志』上・中・下巻
- 佐々木京極友の会1996『柏原地区の古文書（二）徳源院宝物展』
- 滋賀県教育委員会（2017）『滋賀県遺跡地図 平成28年度』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1987）『宝持坊遺跡発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2011）『清瀧寺遺跡・能仁寺遺跡』
- 滋賀県教育委員会・公益法人滋賀県文化財保護協会（2014）『清瀧寺遺跡・能仁寺遺跡Ⅱ』
- 山東町・町史編纂委員会（1991）『山東町史』
- 田岡香逸（1968）「滋賀県坂田郡山東町清瀧・徳源院京極家墓所の宝篋印塔群」『近江の石造美術（一）』民俗文化研究所
- 谷口徹（1996）「山東町」『中近世古道調査報告書2 中山道』滋賀県教育委員会
- 徳源院（1978）『滋賀県指定有形文化財 徳源院三重塔修復工事報告書』
- 中川治美（2011）「清瀧寺徳源院にまつわる三つの絵図」『淡海文化財論叢』第三輯 淡海文化財論叢刊行会
- 中川治美（2012a）「第1章遺跡を取り巻く環境」「第5章総括」『清瀧遺跡・能仁寺遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 中川治美（2012b）「京極家菩提寺「清瀧寺」の実像を追う」『淡海文化財論叢』第四輯 淡海文化財論叢刊行会
- 肥後和男（1933）『滋賀縣史蹟調査報告 第五冊』滋賀県丸亀市史編さん委員会1994『新編丸亀市史』2 丸亀市
- 宮島敬一（2008）『浅井氏三代』吉川弘文館
- 用田正晴（1984）『滋賀県文化財だより No.92』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

（なかがわ はるみ：調査課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.34 2021.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages